

「ミヌシロ ―白糸の祈り―」

プロット

テーマ: 命・記憶・祈りの継承

- ・舞台は山間にある小さな村で、現在は忘れられた古い信仰がある
- ・白布を織る少女が命を織り終えることで村が存在し続ける
- ・ヒロインたちは糸を織り、白い布が完成すると死を迎える“蚕”的宿命を背負う
- ・主人公(現代の大学生)は卒論の取材で村を訪れ、夢や幻視を通して、過去の少女たちと出会う

現代から迷いこんだ主人公が、三人の“生きた証”を受け継ぐ物語

逆順的にヒロインたちの死の受容を後押しし、主人公の生となる
(澄羽→澪→祈織→主人公)の継承

現代で主人公が生きていることがヒロインたちの死を決定づけている

澄羽(すう): 生と始まりを象徴する少女

- ・知っている身体と知らない心で白布を織り続ける
- ・主人公と過ごす時間は、少女に生きることの尊さと死の受容を与える
- ・「生きたい」「空を自分の羽で飛んでみたい」
蚕の成虫には翅(はね)があるのに、自分の力で飛ぶことはできない

澪(みお): 記憶と夢を象徴する少女

- ・澄羽の糸を受け継ぎし存在
- ・古びた手帳を手にし、記憶を映す池を静かに見つめている
その池を通して、夢か現か分からないままに主人公と心を通わせる
- ・主人公は夢だと気づかず現実と思っている
澪は現実だと思えず夢だと信じている

- ・彼女は現実で会いたいと願い、主人公は夢でしか会えない
- ・日記＝夢の反射鏡
濡が夢で見たことを日記に書く → 主人公がその断片を読む → 夢が終わる＝濡が生を終える

祈織(いおり)：祈りと終わりを象徴する少女

- ・二人の糸を受け継ぎし存在として、村の真実を語る
- ・最後の織り手であり、主人公と自分たちの継承を理解している
蚕的宿命を始めから受け入れており、澄羽や濡よりも成熟した温度を持っている
- ・「受け継ぐこと」と「祈ること」それは死ではなく、生きた証を織り上げる行為
- ・「村の伝承と輪廻」命の終焉と再生の儀式
- ・全ての想いが祈りとして結ばれ、主人公が継承者となる